

第1章 「英語の時代」に — 今、なぜ語源か?

中 学1年生の娘が、定期テストの前日だというのに、パソコンに向かってなにやらやっています。

「なに遊んでいるんだ」と叱ろうと思った矢先、こちらを向いて、「お父さん、明日の技術家庭科の試験でワードの文書に写真を貼り付けるのが試験範囲なんだけど、やり方がよくわからないんだよね。今、deleteで消したんだけど、ここからどうするのかな?」

「は!?!」...こちらはあいた口がふさがりません。

「技術家庭科って、いすをつくったり、かんなのかけ方を習ったりするんじゃないの?」

それから、今使っていた“delete”って何だよ。キーボードの右上にある“del”はdelete(消去する)っていうキーだけど、君、昨日は英語の試験でinteresting(おもしろい)も知らなかったじゃないか。それがなんでdeleteは知っているんだよ。10年前なら大学受験生だって知らないような単語だよ。

そういえば、大学入試センター試験の会話問題でも、文書を間違えて消去してしまった、という文で“delete”が使われていました。

時代が変わってきたのだ、としみじみと思います。

Bob Dylanの“The Times They Are A-changing’...”(時代は変わる)を高校生の頃に歌っていたときには、時代の変化を大人たちに突きつけていたのは、確かに筆者とその仲間たちだったのですが、今度はそれを突きつけられるときが来ています。

しかも、想像もしなかったようなかたちで。

(1) 「英語の時代」

インターネットを通じ、英語は私たちの日常に入ってきています。私たちの生きている時代が、いろいろな意味において「英語の時代」であることに異論はないと思います。

10年前ならば、未来への希望の言葉のように響いていた「国際化」という言葉が時代遅れに感じられるほどに、「世界」は英語に乗って日常の世界に入り込んでいます。

「今」を、また「これから」を生きるためには、英語に背を向けることはできません。

でも、私たちは英語を「使う」ために必要な単語力が圧倒的に少ないのです。

私たちが学校で習う単語をすべて覚えてマスターしていれば、それだけでも、かなり役立つのですが、本を読む、専門に生かす、ということに限って言えば、単語力が足りません。

もっともっと、「わかる」、「使える」単語の数を増やさなければならぬ、というのは、他人に言われるまでもなく、誰もが感じていることではないでしょうか。

語源を活用するのは、「使える」ように単語をマスターするためにもっとも楽しく、能率的なやり方です。

本書では、英語の語源を「使える」英語に生かすためにどう活用すればよいか、の道筋を示していきます。

これまで、英語を学ぶという視点から、語源の有用性について真正面から向き合っていくような本はありませんでした。そのため、英語の語源の使い方について、無理解、偏った見方が広がっていました。